

日 本 音 楽 集 団

NIHON ONGAKU SHUDAN

1968

日本音楽集団とは

日本楽器のアンサンブルによる現代音楽をつくり、発表する、作曲家と演奏家の集団です。我々の作曲活動と演奏活動とは、互いに有機的な関連を持って行なわれています。そして我々のつくり出す音楽は国民感情をふまえた「日本の音楽」であることと、最も現代的で新鮮な作曲、および演奏であることとを、はっきりと意識して活動を行なっています。

同 人

日本音楽集団は、日本楽器の演奏者、指揮者、作曲家およびディレクターが一体となってかたちづくっており、このメンバーを同人と呼びます。

絃 楽 器	(箏)	坂 井 と し 子
		白 根 き ぬ 子
		野 坂 恵 子
	(十七絃)	宮 本 幸 子
	(三 絃)	杉 浦 弘 和
	(琵琶)	山 田 美 喜 子
管 楽 器	(横 笛)	向 山 英 一 郎
	(尺 八)	横 山 勝 也
		宮 田 耕 八 朗
		古 賀 将 之
打 楽 器		田 村 拓 男
		清 水 義 矩
指 揮 作 曲		横 山 千 秋
		長 沢 勝 俊
		三 木 稔
		元 橋 康 男
ディレクター		鞍 掛 昭 二

今迄の活動 (演奏会記録を中心に)

39年4月 同人15名をもって「日本音楽集団」を結成。

〃 11月 第1回定期演奏会 (文部省芸術祭参加) 第一生命ホール

〔曲目〕

尺八三重奏曲／清瀬保二

千鳥の曲／二代吉沢検校

弦と日本楽器のための協奏曲／三木

協奏三章「京琴」／元橋

日本楽器による子供のための組曲／長沢

くるだんど／三木

《客演、東混ほか》

40年10月 第2回定期演奏会 (芸術祭参加) 朝日生命ホール

〔曲目〕

日本楽器のための前奏曲／三木

日本楽器による子供のための組曲／長沢

オーボエと日本楽器のための断章／元橋

三つの阿波のわらべ歌／三木

愛の架け橋／長沢

《客演、吉水洋 (オーボエ), 木村宏子 (アルト独唱), 日唱ほか》

41年6月 第3回定期演奏会 日仏会館ホール

〔曲目〕

箏と三絃のための二重奏曲／杉浦

本曲「下り葉」／津軽根笹派所伝

子供のための組曲より1, 4, 5章／長沢

二面の箏のための音楽／入野義郎

二つの牧歌／三木

協奏三章「京琴」／元橋

41年10月 第4回定期演奏会 (芸術祭参加) 第一生命ホール

〔曲目〕

組曲「人形風土記」／長沢

詩経より「緑衣」／船川利夫

笛と琵琶、小鼓とによる「対話」／元橋

古代舞曲によるパラフレーズ／三木

《客演、豊雄秋(笙), 中川とよ子(唄), 増田陸実(ソプラノ独唱)ほか》

42年6月 第5回定期演奏会 日仏会館ホール

〔曲目〕

管弦楽組曲第2番より／バッハ＝音楽集団編曲

古代舞曲によるパラフレーズ／三木

ともし火に寄せて／芝祐靖

子供の四季／長沢

《客演、秋山和慶 (指揮) ほか》

42年11月 第6回定期演奏会 (芸術祭参加) 日仏会館ホール

〔曲目〕

六重奏曲／伊藤隆太

日本楽器による組曲「面」／元橋

三群のための形象／三木

三絃と日本楽器によるディヴェロプメント／長沢

《客演、芝祐靖 (竜笛)》

日本音楽集団に期待する

清瀬保二

日本では特殊な歴史のため、いわゆる洋楽と日本音楽とは別な世界になっている。それはあまりにこの二つの音楽の相違が大きいためでもあるが、しかしその融合はとなえられ、楽器の改良もなされてきた。また作曲、演奏ともいろいろ努力されてきているが、簡単には解決がつかない問題だと思う。

しかし、日本人にとっては、洋楽も日本音楽もそれぞれ魅力があり、なんとかして新しい音楽を創造しなければならぬ運命をもっている。

この二つの音楽のもつ音感、また美学、哲学までつきつめて考えれば、なかなかむずかしい問題にぶつかるのではないかと思う。日本楽器がただ洋楽式になることがその発展でもなく、また洋楽器を使って、いわゆるただ日本式な音をさせたからといって真の民族的な音楽になったともいえない。

要するにわれわれは新しい「芸術」を創らなければならないのである。

このことは、そう短時間でできるものとは思えないし、深く反省し、粘り強く模索しなければならないだろう。

幸い日本音楽集団が結成され、新鮮な作品と演奏とが多大の反響を呼んでいる。この運動がさらに大きな規模において発展することを心から願っている。

日本音楽集団のレパートリーとその楽器編成

NOS ナン バー	曲 名	作 曲 者	作 曲 年 (昭和 代)	所 要 時 間 (分)	横 笛	尺 八
1	「くるだんど」奄美の旋律によるバラード	三木	38	15	1	2
2	弦と日本楽器のための協奏曲	三木	39	21	1	2
3	協奏三章「京琴」	元橋	39	17	1	2
4	日本楽器による子供のための組曲	長沢	39	20		3
5	オーボエと日本楽器のための断章	元橋	40	19		2
6	三つの阿波のわらべ歌	三木	40	10		1
7	愛の架け橋	長沢	40	18	1	2
8	箏と三絃のための二重奏曲	杉浦	36	10		
9	二つの牧歌	三木	41	11	1	
10	子供の四季	長沢	41	15	1	2
11	古代舞曲によるパラフレーズ	三木	41	27	1	2
12	組曲「人形風土記」	長沢	41	25	1	2
13	笛と琵琶、小鼓とによる「対話」	元橋	41	18	1	
14	バッハの管弦楽組曲第2番より	同人編	42	7	1	2
15	三群のための形象	三木	42	17	2	2
16	三絃と日本楽器による ディヴェロップメント	長沢	42	20	1	2
17	組曲「面」	元橋	42	18	1	2

<横 笛=竜笛・篠笛・能管><尺八=1尺4寸管(♯F)～
2尺4寸5分管(A)>

び わ	箏	十 七 絃	三 絃	打 楽 器	指 揮	そ の 他 の 楽 器 お よ び 人 声	備 考
	(2)	1	1	3	○	混声合唱	南日本放送委嘱, 昭和 39年度民放大会入賞作
1	2	1	1	2	○	弦楽合奏	
1	2	1	1	2	○	京琴独奏	
1	2	1	1	2	○		
	2	1	1	2	○	オーボエ独奏	
	3	1	1	1	○	混声合唱	
	2	1	1	2	○	アルト独唱, 混声合唱	
	1		1				
				3	(○)		
1	2	1	1	3	○	バリトン独唱, 児童合唱	NHK委嘱作品
1	2	1	1	2	○	ソプラノ ヴォーカリーズ	NHK委嘱作品
1	2	1	1	2	○		
1				1			
1	2	1	1		○		
	2	1		2			NHK委嘱作品
1	2	1	1	2	○		
1	2	1		2	○		

<打楽器=小鼓・大鼓・太鼓・桶胴・締太鼓; 鈴・鉦・鉦鉦・銅拍子; 木鉦
・木魚・編木・ささら・拍子木; 笏拍子・四つ竹他>

作品の紹介

●NOS. 1 「くるだんど」 奄美の旋律による日本楽器と混声合唱のためのバラード

美しい南の島である奄美には為政者と労働者の激しい相克の歴史が秘められている。どれい達は黒い雨雲の出現を見て「黒(くる)だんど」と呼ぶ。雨中でも止むことのない作業の苦痛を予見した切実な声である。この曲は彼等が働き、嘆き、うさ晴らしをしたその言葉や旋律の断片をかりた、能動的な日本の音楽をめざす賛歌である。

●NOS. 2 弦と日本楽器のための協奏曲

陰旋によるアダージョ——陽旋によるアレグロ

この曲では三つの異なった次元でそれぞれ対立する二つずつの要素が、曲の発展のための支柱となっている。それは拡大された陰と陽、緩と急、そして二つの楽器群の存在である。とくに洋楽器である擦弦楽器が持続的で明確な縦横の線を持つのに対して、日本楽器は打楽器の特性や、音程その他における不確定な要素において勝っていることを、重要なポイントとしてとらえている。

●NOS. 3 協奏三章「京琴」

京琴は京都に生まれた琴類の一つで、鉄線の絃の張られた非常に珍しい楽器である。年代は不明だが、かなり古い時代のもので現在ほとんど使われていない。この曲は京琴の特殊な音色を生かして、全体がゆったりとした流れのなかに三章にまとめられている。(演奏に際しては京琴の専用アンプが必要である。)

●NOS. 4 日本楽器による子供のための組曲

全部で5章からなる自由な組曲である。日本楽器を媒体として生き生きと描きだされた子供の世界であり、マスコミ音楽のはんらんの中に育った現代の子供たちにも、新鮮な感動と夢とを与える作品である。

●NOS. 5 オーボエと日本楽器のための断章

全部で3章からなっている。旋律的なオーボエの「清流」と、打弦的な日本楽器の「律動」この相反する二つのものの対比の中を尺八の保続音的な対旋律がとりもつ形となっている。独奏オーボエと日本楽器のグループとの音の融合をはかった作品である。

●NOS. 6 三つの阿波のわらべ歌

1. 中の中のかぼうさん 2. 子守唄 3. 猫の嫁入

この曲は既存のわらべ歌のうつしかえではない。伝承された旋律と、ふるさ

とのイメージをもとに作曲者によって生みだされた想像の旋律とが、たくみに混交して使用されている。1.は「かごめかごめ」と同種の遊び、2.は殆んど創作による望郷の歌、3.は同名の手まり歌による快活で小さなバラードである。

●NOS. 7 愛の架け橋 (和田芳恵作「愛の民話」より。中江隆介作詞)

信州、梓川の急流にかけられた「雑食橋(ぞうしばし)」にまつわる民話をモチーフとしたものである。川の兩岸に分かれて住む貧しい恋人同志が、永い年月の苦労の末に川に橋をかけて、二人の恋を果せるという話である。アルト独唱者には深味のある言葉の表現が要求される。

●NOS. 8 箏と三絃のための二重奏曲

二つの章からなる自由な形式の小品である。元来邦楽の中にある、楽器だけの「手事(てごと)」などにみられる掛け合いの面白さをねらっている。また、三絃の調絃と、箏の柱(じ)をかなり自由に動かして、従来のこの面での制約をのがれているのも大きな特徴である。

●NOS. 9 二つの牧歌 (横笛と打楽器のための)

日本の横笛は雅楽や神楽、あるいは能楽や長唄などに数多く使われながら、独奏楽器としての作品は殆んどない。この作品は横笛(篠笛と能管)を独奏楽器として正格にとり扱い、その音色やメカニズムを被露する意図でつくられたものである。

●NOS. 10 子供の四季

春夏秋冬の4章からなっている。子供たちに我々日本人の民族楽器である日本楽器に親しんでもらいたいというねらいから生まれた曲で、四季折々のわらべ歌を素材に描きだされたファンタジーである。

●NOS. 11 古代舞曲によるパラフレーズ

古代と現代を結ぶ、アクティブでありながら古典的な世界をめざし、荒々しさと繊細さとのきわどい均衡の中で醸成された多様な色彩とダイナミズムを持つ五楽章から成る。

前奏曲は器楽的な構成美を意図した簡潔な様式で書かれ、後に続く4曲を集約しながら、独得な古典的構成と、その中にちりばめられた民族的要素を感じさせる。相聞は万葉の恋の歌。ソプラノ、能管、琵琶、箏群、尺八等がそれぞれ異った表情で重なり合い、応答し合う抒情的な楽章である。田舞は田植の神事の舞。後に平安、鎌倉時代に田楽として遊芸となったが、この曲では原始の神事をほうふつとさせられる。誅歌は葬祭の歌。一管の低い尺八のおおらかな流れをめぐって箏群ともう一管の尺八の衝動的な慟哭のような動きがからまる。

囃歌^{かがい}は、上代、男女が相集って互に呼び合う群舞をさしている。歌垣とも書き、後世の盆踊りの起源ともいわれている。人間の本能に根ざした快い昂奮が、遠いざわめきから次第に高潮して頂点に達し、やがて跛行的に去って行く。

●NOS. 12 組曲「人形風土記」

この組曲の主題としてとりあげられているのは、ニポポ、こけし、のろま人形、流しびな、キジ馬、木うそ、以上六つの郷土人形もしくは郷土玩具というべきものである。これらのものは日本各地の「ふるさと」の風土を母として生まれてきた、単純、素朴なもので、こういう伝統的な、しかもその地方特有の人形を通して、我々日本民族の伝統——祖先から受けつがれてきた生活や魂——がうかがわれるといえよう。

●NOS. 13 笛と琵琶、小鼓とによる「対話」

人間の心のうちにひそむ、いろいろの異なった感情の対話を、楽器にたくして表現しようとするものである。一章「唄」では安静と心のふるさとを、二章「舞」では喜びと躍動を、三章「語り」では憎しみと不安をそれぞれ表現しようとしている。日本楽器の得意とする心理的表出を新しい観点からねらって書かれた曲である。

●NOS. 14 バッハの管弦楽組曲第2番より

1. ロンド 2. ポロネーズ 3. パディネリ

バッハの管弦楽組曲は、古典的に均整のとれた構成美と、旋律の美しさで知られている。これを日本楽器にオーケストレーションしなおしたねらいは、バッハの音楽の持つ美しさの要素が、日本楽器にとって決して無縁のものではなく、むしろ元来それらを内包していることの実証を行なうことにある。

●NOS. 15 三群のための形象

管、絃、打という三つの日本楽器のグループのために書かれた作品で、それぞれのグループが特徴的な音楽様式上の形象を表わすかたちになっている。それらの形象は決して既存のものではなく、作曲者が独自の眼でみつめ、探りあてた、新鮮にして素朴なかたちである。

居機^{いき}とは管を吹き抜く呼吸の絶妙な気合いをいう。文様は綾であり、洋楽的にいうならばアラベスクである。擣^うは打ちたたくことであり、音声としてのToh! という気合いをも連想させる。

●NOS. 16 三絃と日本楽器によるディヴェロブメント

三絃は日本楽器の中で最もダイナミックな表現力を持ち、また細棹、中棹、太棹と三つの種類があって、それぞれの特色を持っている。また撥や駒を変え

ることによっても、さまざまな効果を得ることができる。この曲では細棹と太棹の三絃が使用され、独奏楽器としての面白さをねらっていろいろの試みがなされている。

●NOS. 17 日本楽器のための組曲「面」

日本楽器のいろいろの伝統芸術、伝統芸能の中に伝えられる、多種多様の面をそれらの面に伝わる昔からの信仰の伝統を考えながら、作曲者は新たに四つの個性を抽出することによって興味深く描き出そうとしている。

翁面^{おきな}＝老人を象徴するもの。狂言面＝表情豊かに語りあうこっけいな面。女面^{にょ}＝神秘的な中に温厚なやすらぎをたたえる女性の面。鬼面＝荒彫りされた民俗的な鬼の面。

同人の紹介



さか い
坂井とし子(箏)

昭和12年より宮城道雄に師事。17年、東京音楽学校(現芸大)本科(箏曲生田流)に入学し、同本科・研究科を卒業。次いでNHK邦楽技能者育成会(四期)卒業。37年、ヘルシンキにおける世界青年学生平和友好祭に音楽代表として出席。現在、宮城会々員、森の会々員、ふきの会々員。広範囲にわたる演奏活動を行ない、すでに第一流の演奏家として定評のある一方、あくことを知らない研究熱心さでも有名である。



しろ ね
白根きぬ子(箏)

昭和35年、東京芸術大学邦楽科(本科・専攻科)卒業。ひきつづき副手として2年間同校にとどまる。34年、ウィンにおける世界青年学生平和友好祭に音楽代表として出席。35年、箏<泉会>を野坂恵子、宮本幸子とともに結成、毎年定期演奏会をもち現在にいたる。40年、ベルリン音楽祭に出演。演奏面においてももちろんのことであるが、とりわけ後進の指導力に優れたものを持っている。



の さか けい こ
野坂恵子(箏)

昭和38年、東京芸術大学邦楽科(本科、専攻科)卒業。ひきつづき副手として4年間同校にとどまる。35年、箏<泉会>を結成。40年、現代作品を中心としたリサイタルを催す。また、ベルリン音楽祭に出演。華麗な音色をもつ奏者として広く活躍するかたわら、門人の育成につとめている。



みや もと さち こ
宮本幸子(十七絃)

昭和35年、箏<泉会>を結成。昭和39年、アラブ連合国主催第一回民族音楽祭に日本代表として参加。40年、ベルリン音楽祭に参加。現在、正派音楽院教授、正派合奏団員および助手。箏および十七絃の奏者として活躍しているが、とくに数少ない優れた十七絃奏者として著名である。



すぎ うら ひろ かず
杉浦弘和(三絃)

昭和10年、東京に生まる。33年、東京芸術大学邦楽科(本科、専攻科)卒業。ひきつづき副手として同校にとどまっている。32年、長唄「東音会」結成と同時に会員として参加。現在中堅として広く活躍しているが、とりわけ現代作品の演奏に強い情熱を持ち、新しいテクニックを次々に吸収している。



やま だ み き こ
山田美喜子(琵琶)

台北州立台北第一高等女学校卒業。同校家政科および研究科卒業。8才より箏(生田流)を、10才より筑前琵琶を学ぶ。後、宮城道雄門人となる。現在、宮城社師範。さらに箏美会を結成し、門人の育成にいそむかたわら、現代琵琶の演奏者として広く知られ、各方面で活躍している。



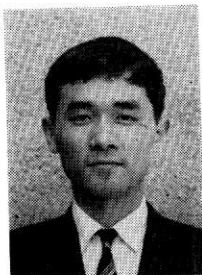
ひやう やま いち ろう
向山英一郎(横笛)

昭和16年、岐阜に生まる。40年3月、東京芸術大学邦楽科を卒業。現在「東音会」に所属して活躍している。若手のホープとして将来を嘱望されている。



よこ やま かつ や
横山勝也(尺八)

昭和9年、静岡県に生まる。幼少より父蘭畝に琴古流を学び、34年、上京して福田蘭童、海童宗祖両師に師事す。36年、NHK邦楽技能者育成会を卒業。37年、第7回世界青年学生平和友好祭ヘルシンキ大会に音楽代表として出席。現在各方面で演奏活動を続けるかたわら、門人の育成に努力している。古典的奏法の演奏者として若手の第一人者であり、また音色の美しさで知られている。



みや た こう はち ろう
宮 田 耕 八 郎 (尺八)

昭和13年、東京都に生まる。

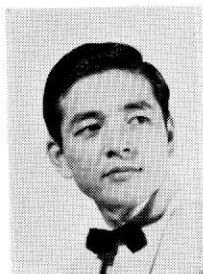
現在フリーな立場で演奏活動に専念するかたわら、後進の指導にあたっている。クラリネット奏者も舌を巻くほどのテクニシャンで、現代作品の演奏者として右に出るものがない。



こ が まさ ゆき
古 賀 将 之 (尺八)

昭和17年、福岡県大牟田市に生まる。

昭和36年より酒井華山氏について都山流尺八をはじめ。現在フリーな立場で演奏活動を行なっているが、将来を嘱望される新人である。



た だ ひろ お
田 村 拓 男 (打楽器)

昭和10年、島根県に生まる。東京芸術大学委託生として2年間修業、マリンバを朝吹英一氏、打楽器を小宅勇輔氏、ピアノを滝崎鎮代子氏に師事。元東フィル団員。37年、マリンバによるリサイタルを催す。現在、東京マリンバグループ会員、東京放送管弦楽団所属。シャープなテクニックの持主として広く活躍中である。



し みず よし のり
清 水 義 矩 (打楽器)

昭和13年、東京に生まる。41年、乞われて日本音楽集団同人となる。現在、各方面において幅の広い演奏活動を行なっている。小鼓、大鼓をはじめとする日本打楽器のすべてに精通し、さらにマリンバなどの洋楽器も自在に演奏する。



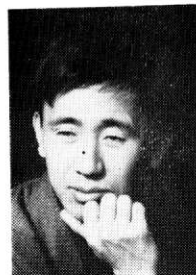
よこ やま ち あき
横 山 千 秋 (指揮)

昭和6年、青森市に生まる。31年、東京芸術大学卒業。27年より斉藤秀雄氏に指揮法を学び、日本青年交響楽団、群馬フィルハーモニー交響楽団を指揮。36年、東京混声合唱団を指揮してデビューし、労音・放送などで活躍。その後フリーとなり、邦人作品の演奏、紹介につとめている。現在、日本合唱指揮者協会理事、また新交響楽団常任指揮者としても活躍している。整った端正な指揮ぶりは定評がある。



なが さわ かつ とし
長 沢 勝 俊 (作曲)

大正12年、東京に生まる。日本大学芸術学部に学び、24年人形劇団ブークに入団、人形劇の作曲を始める。大沢和子、清瀬保二氏に師事。37年、人形劇フェスティバルに参加のため渡欧、ヨーロッパ各国を遊学。主要作品は別記の日本楽器によるもの他「合唱曲・鹿踊りのはじまり」「フルートとピアノのためのソナタ」



み き ゐのる
三 木 稔 (作曲)

昭和5年、徳島市に生まる。30年、東京芸術大学作曲科卒業。池内友次郎、伊福部昭の両氏に師事。主要作品は別記の日本楽器によるもの他「トリニタ・シンフォニカ」「バリトン独唱、男声合唱およびオーケストラのためのレクイエム」「合唱による風土記——阿波」「木管とピアノのための六重奏曲」



もと はし やす お
元 橋 康 男 (作曲)

昭和11年、東京に生まる。34年、日本大学芸術学部音楽科卒業。貴島清彦、村田英夫、伊藤隆太の諸氏に師事。主要作品は別記の日本楽器によるもの他「交声曲：勸進帖」「木管五重奏曲」「幻想曲：日本の庭」「交声詩曲：マリモ——アイヌ伝説」



くら かけ しょう じ
鞍 掛 昭 二 (ディレクター)

昭和8年、東京生まれ。32年、東京芸術大学楽理科卒業。現在
ツィス木管五重奏団ディレクター、帝京短期大学講師、リズムの
会々員。音楽全般にわたって巾の広い活動を行なっている。

<メ モ>

日本音楽集団 連絡先

東京都

清水 義 矩 方

TEL

<メ モ>